

外界非実在論において仏教は成立するのか

小林久泰（広島大学）

発表要旨：

本稿の目的は、ミーマーンサー学派クマーリラの唯識説批判とその批判に対する仏教論理学派プラジュニャーカラグプタの回答を検討することで、外界非実在論における仏教成立の可能性、およびプラジュニャーカラグプタの唯識的仏教観を明らかにすることである。

クマーリラはその主著『シュローカ・ヴァールティカ』の中で、「ニラーランバナ・ヴァーダ」章、「シューニャ・ヴァーダ」章という二章に渡り、唯識説批判を極めて詳細に行っている。プラジュニャーカラグプタは『プラマーナ・ヴァールティカ・アランカーラ』において、特に前者、「ニラーランバナ・ヴァーダ」章を全体に渡って引用し、逐一それに回答を与えている。その議論の応酬の中で、プラジュニャーカラグプタは、クマーリラが提起した「認識外部にいかなるものの存在を認めないで、そもそも仏教は成立するのか」という唯識思想の根本的問題に回答を与えるかたちで、彼自身の仏教理解を提示している。

クマーリラの批判は次のようなものである。認識がその外部のもの的一切関与することはないという唯識の究極的な世界観に立てば、あらゆるものの区別は成立しない。しかし、その場合、ダルマ・アダルマ間の「区別」を前提とした宗教実践、師匠・弟子間の「区別」を前提とした教示活動なども成立しなくなるのではないのか。また、輪廻者・解脱者間の「区別」が成立しないとすれば、君たち仏教徒が目指す解脱のための努力も全く無意味なものになるのではなかろうか。

このようなクマーリラの疑問に対するプラジュニャーカラグプタの回答のポイントをまとめれば、次のようになる。

- (1) まず、このような「区別」の概念は輪廻者の理解を前提としていること。
- (2) そしてそれは、見戯に等しいものであること。
- (3) 解脱者である仏陀は、象のように目を瞑り、その遊びに付き合っていること。
- (4) しかし究極的には、やはりあらゆる区別は存在しないということ。

例えば、ママゴト遊びを想定すると分かりよい。子どもたちが泥団子を本物の団子とみなして遊んでいるとしよう。大人は、たとえそれが泥団子であると知っていても、そういった子どもたちを前にすれば、本物の団子であるかのように振る舞う。それと同じように、仏陀は、たとえ真実にはいかなる区別も存在しないと知っていても、弟子たちの区別を前提とした活動に付き合っているという訳である。

この議論の中でプラジュニャーカラグプタは、あらゆるものの無区別を説きながらも、仏陀の存在を否定せず、その上でさらに仏陀と仏陀でないものの間の無区別を説いている。外界非実在論こそが仏教であるとするプラジュニャーカラグプタにとって、「師匠である」「弟子である」「仏陀である」「仏陀でない」という判断は、究極的には無区別の中に無意味化される。しかしそれでもなお、弟子に対して慈悲深く接する師匠としての仏陀の存在を彼が否定することはない。この点に、プラジュニャーカラグプタがひとりの「仏弟子」として仏陀に対して抱いている信仰心の一端を垣間見ることができる。

キーワード：クマーリラ、プラジュニャーカラグプタ、唯識